



ビリーと おお大きな しんぱいや心配屋

ウサギの ビリーは、
お落ち着きがありません。
ゆうしょく夕食は にんじんポテト・
パイだ というのに、
ほかの あたまことで あたま頭が
いっぱいなのです。

「ねえ、とうお父さん。
もし めざ目覚まし時計が
聞こえなくて お起きれ
なかったら、どうしよう？
がっこう学校におくれちゃうよ！」

「そうだな。もし
めざ目覚まし なが鳴っても
ねていたら、わたし私が お起こして
あげよう。そうすれば、
ま間に あ合うだろう。」と、
とうお父さんが こた答えました。

「だけど、もし とうお父さん おも
起きれなかったら？
その時 ときは、どうなるの？」
ビリーは べつ別の しんぱい心配を
はじし始めました。



「それも そうだな。その時は、私が おまえの 先生に 電話を して、おまえが 少し おくれることを 伝えなくてはな。その後、車で おまえを 学校まで 送って行ってやろう。」

「だけど、1時間目の 授業には おくれちゃうでしょ？ それに、席に 着くまで、みんなに じろじろ 見られたら、どうしよう？」 ビリーは うなだれました。

「それだけなら、心配することは ないだろうさ。」 お父さんが ふくみ笑いを しながら 言いました。

「そうかあ。」 ビリーは 食べ物を つまみながら、じっと 考えこんでいました。そして、次の 心配を し始めました。「もし 明日、宿題を 持って いくのを わすれたら、どうしよう？ リーマス先生は、きっと おこるだろうな。」

「ビリー。今までに そんな 心配を したことなんて、なかったわよね。一体 急に、どうしたの？」 お母さんが たずねました。

「わからないよ。ただ、どうしても 心配に なっちゃうんだ。」 ビリーは、あわれな 声で もごもごと 答えました。

その夜、ビリーが ベッドに 入っていると、翌日についての 心配事が、後から 後から、とめどもなく 出てきてしまいました。(もし こうなったら・・・、もし ああなったら・・・、もし・・・)

★★★

翌朝 になりました。ビリーは 目覚まし時計が 鳴ると、すぐさま ベッドから はね起きました。やったー！ ちゃんと 目覚まし が 聞こえました。今日は、学校に 間に合います。

教室では、親友の ハリネズミの アレックスの となりに 座りました。図画工作の 時間は、とても 楽しい ものでした。お昼になって お弁当箱を 開けると、ビリーの 大好きな ものばかりが はさまった、おいしそうな にんじんサンドイッチでした。お昼ご飯が 済むと、アレックスと、キジの フィスクと、アナグマの スモグルと いっしょに、校庭で 遊びました。授業が 終わると、リーマス先生は 次の日までに やって 持ってくる 宿題を みんなに 配りました。

ビリーとアレックスは、いっしょに森の中を歩きながら、お母さんのために
キイチゴをつんで帰りました。今日は、良い1日でした。

「ただいま！ お母さん！ お父さん！ 今日は、すごくいい1日だったよ！」
ビリーは元気いっぱい、リビングルームに入りました。「お母さんのために、
キイチゴもつんできたんだ。」

ビリーはカバンを開けてキイチゴを出しました。すると・・・宿題がありません！

「お母さん！ お母さん！ 宿題が入ってない！」 ビリーは泣きべそをかきながら、
通学カバンに入っていたものを全部出して、その日やらなくてはいけない宿題を
探しました。

「まあ、本当にないの？」と、お母さんがたずねました。

「うん、本当にないんだ！ もしかしたら、アレックスといっしょに森の中で
キイチゴをつんでいた時に、落としちゃったのかも。行って、探してくる。」

ビリーは、なくした宿題を探すために、玄関に向かいました。お父さんがビリーの
肩をポンポンとたたいて言いました。「じきに暗くなる。その前に帰らなくちゃ
いけないことは分かっているね。それに、今だって、もうよく見えないんじゃないかな。」

ビリーは窓の外を見ました。お父さんの言うとおりの夕方で、太陽が
しずみかけています。

「だけど、宿題がなくて、どうしたらいいの？」

「なくしたことを、先生に言うんだな。きっと、分かってもらえるさ。だれだって、
時にはなくしものをするものだ。」

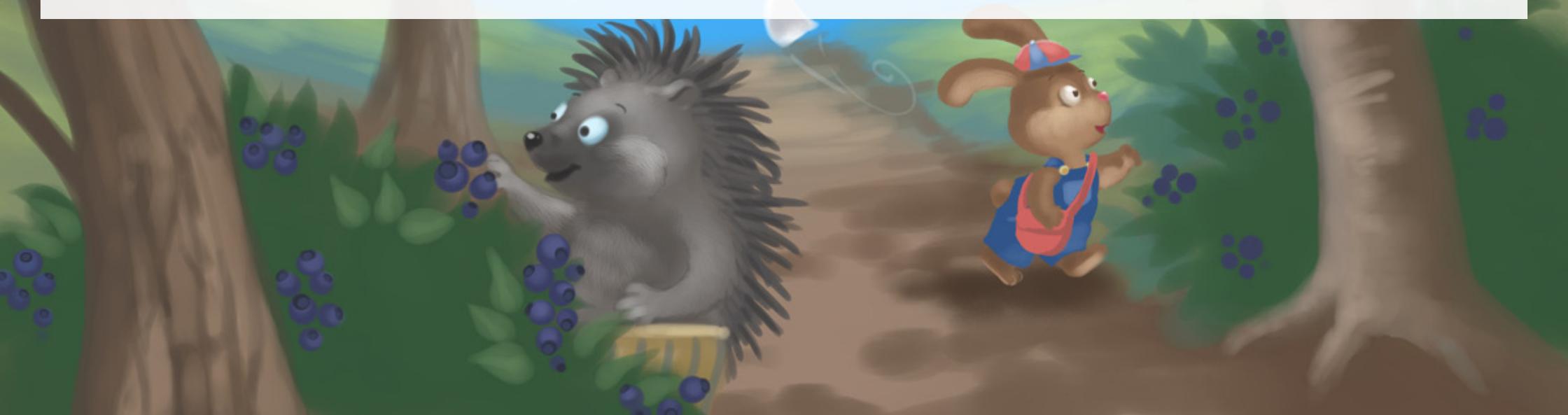
「だけど、もし先生に、わざとなくしたと思われたら？ もし・・・」 ビリーの
声は弱々しくなってきました。

「ビリー、食卓の準備を手伝ってこないかい？ その後、私がおまえくらいの
年だった時に飼っていた、ペットのナイトバンブ（想像上のモンスターの名前）の
話をしなしてあげよう。」

ビリーは興味津々です。「ナイトバンブって、本当にいるの？」

「まあ、私にとっては、現実のものだったんだな。名前は、『大きな心配屋』だ。
ナイトバンブはたいていそうだが、こいつも、とんだいたずら者だったんだ。」

「本当？ どんなことをしたの？」



「やつは、いつもいつも構って
もらいたがったのだ。だが、私が
構えば構うほど、あいつは大きく
なっていった。部屋がいっぱいにな
ってしまうくらいにな。そして、
私が行くところは、どこにでも
付いてくるようになったんだ!」

「ペットって、ふつう そうじゃ
ないの?」

「そうだな。だが、あいつは
むしろ、やっかいな ペットだった。
その日に起こりそうな ことを
全部 知りたがり、明日のことまで
知りたがった! そして、事あるごとに、
「もし こうなったら」って心配するんだ。
だから、私は やつの ことを「大きな
心配屋」って呼んでいたんだ。とにかく、
私は じきに、やつを あちこち連れ
歩くのが いやになった。いつもいつも
関心を ほしがる ものだから、私は
家族や 友だちとの 時間や 学校での
時間を 楽しむ ことが できなくなって
しまったんだ。

「それで、どうしたの?」

「やつの しつけ方を 学んだのさ。大きな 心配屋が 何かについて 心配事を 言う 時は、
やつの 言うことばかり 聞いていないで、父親に 相談しに行った。それから、祈って 神様に
そばについてくださる ように お願いすれば、大きな 心配屋も それほど くよくよせず、
やっかいな 存在にも ならないと 分かったんだ。



あと、やつがこわがったり心配したり
することはめったに起こらないし、
やつが思うほど大事でもないってことを
自分の目で確かめさせれば、やつは
おとなしくなった。起こりそうなこと
すべてについて疑問をいだって
くよくよするか、それとも勇気を出して
立ち向かうことを選ぶこともできるんだと
わかったのだ。つまり、その、やつがね。」

「それで、勇気を出すことにしたんだね？
つまり、その、やつがね？」 ビリーは
すっかり話に夢中です。

「そういうことだ。で、あの大きな
心配屋も、結局はあつかえるほどの大きさに
ちぢんだ。まもなく、やつはあまりにも
小さくなって、ペットにするほどの大きさでも
なくなってしまったのさ。」

ビリーは夕食の間中、そしてベッドに
入ってからもずっと、お父さんが話して
くれたことについて、考えていました。
そして、自分もきっと、大きな心配屋みたいな
ナイトバンプをペットにしている、あまりにも
えさをあげ過ぎていたんだとわかりました。

★★★

翌朝は、太陽が明るく輝いていました。ビリーは時間通りに目を覚ますと、
お母さんが用意しておいてくれた通学用の服を着て、朝食を食べていました。
すると、急に昨日なくした宿題のことを思い出し、おなかが痛くなってきました。
どうして宿題をなくしたかを話したら、リーマス先生は何と云うだろうか……。
ナイトバンプの大きな心配屋が目を覚ました様子です。



「お母さん。祈^{いの}ってくれない？ ぼく、宿題^{しゅくだい}のことが心配^{しんぱい}なんだ。」と、ビリーが
い
言いました。

お母さんはうなずいて、ビリーのために祈^{いの}ってくれました。そして、家^{いえ}に帰^{かえ}たら
にんじんクッキーを焼^やいておいてあげるわねと約束^{やくそく}し、ビリーをだきしめ、キスして
おく
送^だり出しました。

学校^{がっこう}に向^むかうとちゅうの森^{もり}の中^{なか}、ビリーは歩^{ある}きながら、まだ心配^{しんぱい}していました。
けれども、勇気^{ゆうき}を出^だして、ペットの心配屋^{しんぱいや}にはもう耳^{みみ}を貸^かさないと心^{こころ}に決^きめました。
学校^{がっこう}に着^つくと階段^{かいだん}を上^あがり、ろうかをぬけると、あっという間^まに先生^{せんせい}の前^{まえ}に
来^き
て
いました。

「リーマス先生^{せんせい}。ぼく、昨日^{きのう}学校^{がっこう}から帰^{かえ}るとちゅうで、宿題^{しゅくだい}をなくしてしまいました。
ほんとう
本当にすみません。」

「わざわざ言^いいにきてくれたんだね、ビリー。余分^{よぶん}のプリントがあるから、それを
あげよう。今度^{こんど}はなくさないようにな。」

「はい、先生^{せんせい}。気^きをつけます！」

(心配^{しんぱい}したほどの大事^{おおごと}にならなくて良かった。) 自分^{じぶん}の席^{せき}に付^つきながら、ビリーは
おも
思^{おも}いました。そして、ペットのナイトバンプがずいぶんおとなしくしていることに
き
気づきました。だって、すごくこわいことになるとおもっていたことが、実際^{じっさい}は
たい
大^{こと}した事^{こと}ではなかったんですもの。

お
終^おわり